蘂の柄部の變化したものと申ます、或稚類では是が非常に發達して大きくなります、喇叭水仙などは此例でありますこの中に六本の雄蘂がありますが雌蘂は一個でありますが子房がやはり三室になつて居ります、そして此子房は花蓋の筒部と結合して下生子房をして居ります、此點が百合の類と違ふ所で此植物は、石蒜科に屬するのであります。

東京へは房州から水仙が參ります九州の島原地方では水仙が澤山で耕作の害になる程だと申ますが如何ですか、併し國產のものは皆球が小さくて一球から多數の花梗を出すと申す程で御座いませぬ此點に於ては所謂支那水仙を以て最良としなければなりませぬ、支那水仙と申ても支那一圓に出來るのでなく南部漳州地方に限られるので茲から北清を初め我國に迄輸入せらるゝ量は少々のもので御座いませんさうであります。水盤の中に育てられた大きい球から長きに過ぎぬ葉を抽出した中から大きい花の總が澤山に出て芳香を放つ點はとても在來種の及ばぬ所であつてお正月の飾りとしての一方の雄であると思はれます。

二　羽の雛

杉井ふさ

子供の性として善いこと惡いこと總べて大人のすることを眞似るのは皆樣の御存知の通りであります。周圍の大人が動物を飼つて之を可愛がりますとそれを眼前に見る子供が何で無頓著でをられませう。初めの中は或は氣味惡がるかもしれませんが漸く慣れて其の動物を知れば知る程それに對

する愛情は濃かになつて參ります。斯樣にして日夜親む中、知らぬ間に其の動物に關する知識を得ますので、これがやがて動物學又は比較心理學に對する興味となり研究心となるものであります。

動物を飼つておくといふだけで既に益することは前に申した如くであります。それを更に多少動物學又は心理學の心得ある父兄が自身學術的に其の動物を觀察するか又は子供に觀察することを敎へたなら子供の上に益することも亦愈々大きいのであります。

觀察研究など丶申しますと大變難かしいことでもするかの如く聞えますが實際は極く容易なもので且つ非常に興味の深いものであることは次に御紹介し樣とするハント氏の雛に關する觀察の報告を御覽になれば明であろうと思ひます、氏の觀察は敢て新奇とは申しませんが觀察の方法が如何にも手輕であり、且つ興味湧が樣に覺えますので、若しこれを御紹介した爲めに皆樣の中で、それ程容易くて面白いものなら自分も一つしてみやうといふやうな心を御起しになる方が出來たなら廻らぬ筆をも省みず御紹介申した私も幸ひです、又恐らくはハント氏自身も本望であらうと思ひます。

扨て氏が觀察を初めましたのは日本なら櫻もそろ〳〵咲かうといふ三月三十日のことでそれに使つた雛雞といひますのは其の前日孵つた許りの白黑の二羽であります。

先づ最初の一日卽ち雛にとつては生れてから二日目の正午氏は試みに水で捏ねた碾割をやつてみましたが、二羽共食べませんでした。次にビスケットの粉を入れてやりましたがそれと氣付かない樣子なのでそつと箱の下敷になつてゐる紙の上に落してやつたら初めてたべました。それから互に嘴や眼の啄き合を初めました。鈴卵は二羽共大喜でたべます。氏が手を雛の上に蔽せると白の方

はグイ〳〵と手を押し上げて飛出さうとします。匙に水を入れて二羽の鼻先にもつてつてみましたら黒は吃驚して飛び退きさまピー〳〵と鳴きました。けれども白の方は驚きません。食物の奪ひ合ひを初めました。白の方は黒より丈夫で隨つて食べることも盛に食べます。又其他の點に於ても白の方が進んでゐてパン屑を拾ふ時にも立派にピヨ〳〵と啼けます。午後餌を食べながら黒は突然何物にか驚いて啼き出しましたが氏が聲を掛けたら安心したのでせう其の儘啼き止んでしまひましたこんなことは二度許りありました。白は何かのはづみで水飲の中に嘴を突込んでは頭を上げ又突込んでは頭をあげ都合三度これを繰り返して水を飲むことを覺えました。黒は未だ水を飲むことを知らぬと見えて、水飲の中に嘴を突込んでも其の儘飲まずに出してしまひます。腹が一杯になると二羽共立つた儘で寢入つてしまひました。氏は二羽の上に毛布を掛けてやりました。黒は一度左脚を擧げて爪先を閉ぢました、立つて居るといつてもヒヨロ〳〵としてゐて氏が手を出すと其の働くまゝについて來ました。

第三日。昨日の經驗から今日は最初に二羽の好きな筍卵をやりました。それを食べて居る間に氏が咳をせいたら二羽共吃驚仰天して床にひれ伏した儘數秒間は身動きもしませんでした。まうお互に眼の啄き合はしませんけれど其の代り食物の奪ひ合を盛に初めました。二羽共餌をやると今は何處においてもそれが食物であることを直に知る樣になりました。面白いことには二羽共卵の白味の方が好きであります。白も黒もよく雛鳥のするやうに餌を食べながら嘴をぶる〳〵と振ひます。すると食いかいた碎片が恰も翅あつて飛ぶ小虫のやうに四方に飛び散つてゆきます。それが雛にとつては餘程面白いと見えて其の碎片の跡を逐ふて一尺

位走ります。午後空腹の頃を見計つて赤く染めたビスケットの規那鹽に漬けたのをやりました。白は三度黑は二度啄みましたが食べずによしました。

第四日。昨日と同じく規那鹽入りの赤いビスケットを又やつてみました。白の方は見向きもしませんでしたが、黑は一度だけ啄んでみてそれで懲りてしまひました。白は此の日珍らしくも脚を擧げて頭を搔かうとしましたが體の平均がとれないのでうまくいきませんでした。處が此の白、黑と一腹で親の側に居る雛の方は、いつから出來る樣になつたか知りませんがこんなことはとうから達者に出來ます。箱に砂を入れてやりました。

第六日。白か初めて引搔ける樣になりました。下敷の紙に濡れた處が出來たのを引搔いたのでありますが。黑は日向で丁度牝雞のする樣なませた物ごしで砂を浴びて居ました。二羽共音には實に鋭敏でどんな幽な音でも聞きつけます。白も黑も日向に立つた儘で寢入つてそれから座るといふより寧ろそのまゝどうと倒れるのが癖であります。時には側臥することもありますがそれは極く稀であります。午後又々例の赤い苦い御馳走をやりました二羽共吃驚して中でも小心な黑は警戒の聲をさへ立てました。けれどもちきに勇氣を回復してビスケットの周圍を廻つたり、其の上に乘つたりしてゐましたが口には決して入れませんでした。後砂二皿をやりました。

第七日。白は砂皿の内を盛に引搔き廻してゐました。未だ黑の引搔くのを見たことはありません。後白は兩足を交る〳〵使つて搔いた後恰も食物でもあさるかの樣に搔いた後を嘴で啄いてゐました箱から出してやると白はチョコ〳〵と中々よく走ります。不意の嘘に度膽を抜かれて逃げ惑ふた樣は餘程可笑くありました。暫くして氏は初めて黑

の引搔くのを見ました。やはり白と同じやうに下敷の紙の濡れた處を二度許り引搔いたのであります。何しろ初めてのことで未だ脚がぶる〳〵と震へるので搔いた跡ははつきりとしてゐません。黑も他の鳥の例に洩れず、先づ最初に片脚で引搔くことを覺え、次に兩脚を使ひ分け最後に搔きながら啄む樣になつたのであります。白は時々後方に走ります。まう今は氏が手を出してもそれを逐ふて來るやうなことはありません。

第八日。白は今少しで人手を貸りずに獨りで箱の外に飛び出ることが出來ます。氏が箱から出してやつた時白は兩の翼を擧げて數尺も飛び廻りました。けれども斯うして飛び廻るだけで、それ以上戲るゝこともしませんでした。それから二羽して紙を引搔いたり啄いたりして餘念なく遊んで居ました。其の引搔いた紙といふのは別に珍らしいものではなく唯一面に印刷されたものでした。二羽共大分引搔き方が達者になつてきました。

第九日。朝の內白も黑も水皿の內で得意の引搔き廻しをやつて上機嫌で騷いで居ました。其の皿といふのは面のザラ〳〵したものであります。黑は箱の天頂まで飛び上つて嘴と脚とを働かしてやつと外に出ました。白は午後になつて出ました。莓の碎片を試みに投げてやつた處が白も黑も其の赤い色に嚇されて觸つて規那鹽の有る無しを究めやうともせず、恰も恐ろしいものであるかの如く怖がつてゐました。其の實此の莓には規那鹽は毛程もはいつてゐなかつたのです。ツルコケモヽをやつた時もやはり同樣でした。二羽の中でも特に怖がるのは黑の方であります。

第十日。白は一度外に出て自由の空氣に觸れることを覺えて以來、窮屈な箱生活を嫌つて幾度押し戻してもピヨン〳〵飛び出してきて仕方ないので終には箱に蓋をしました。けれどもそれを取るや

否やまた直に飛び出すといふ始末であります。斯くの如く一方に白が大騒ぎして居る間に黒は悠々と寐轉んで白の翼に抱れやうと其の身を白の體の下に摺り寄せてゐました。

第十一日。廣間で何か音がした時白か黒か孰れか分りませんが、おばあさんの雞が出すやうな警戒音を出しました。氏が嘘をした時白は椅子の脚に黒はそれと反對の方向に共に逃げていつて少時の間息を殺して蹲つてゐました。何といつてもかうして二羽一緒に居るといふのは互に力強いに相違ありません。其の證據には二羽睦しく遊んで居る時、そつと其の内の一羽を隱すと取り殘された一羽は非常に悲しげな力ない樣子をするのでもよく解ります。紙の上で二羽が餌を食べて居る時インキを二三滴たらしてみました。すると白は忽ちそれを啄いたり引搔いたり又啄いたりしました。それから少時他へいつてゐましたが又直戻つてきて四度許り引搔いたり啄いたりしました。

氏は小さい鏡を持つてきてそれを自身の足に立て掛けて二羽の姿のよく映る樣な位置に置きました。案の定二羽共鏡に映る自身の姿にアッと許り吃驚したのであります。氏は二羽がどうするかしらんと眼も離さずに見て居ましたら、間もなく白はつか〳〵と鏡の前に進んで來て自分の姿を頻りに眺め初めました。其の癖餘計吃驚したのは白の方なのでした。それから後も白は鏡の前に來る毎に丁度牡雞が蹴合ひでも初める時のやうに頸を延すやら頸毛を逆立てるやらして力んでゐました。暫くして白は鏡の側面をつゝき初めました。終には鏡に向つて突進を初めたといふと可笑しく聞えますが、實は悲しい哉無經驗な白には實物とその影との區別が解らぬので、巧妙な鏡の作用に騙られ自分の前には敵と信じる雞より外何物もないものと獨合點して遮仁無仁進んで鏡と鉢合せの滑稽

を演じたのであります。之は白許りでなく黒もしたのであります。然も二羽共一遍で懲りず數度痛い經驗を繰り返しました、中でも白は鏡の前を通りながら映つてゐる像をジロリと睨んで今にもそれに突進しさうな樣子をしますが通りすぎて何も見えなくなると不審の眼を瞠つては又引返して來ます。斯樣にして終に鏡の前を通り越して後に廻りました。何をするかと見て居ると、そこら中見廻してからフイといつてしまひました。數分後二羽連れ立つてやつてきましたが鏡の中の雛がとうも無氣味でならぬやうでした。後白は更に獨で鏡の前に來て胡亂の眼を光らせてゐました。

第十二日。生きた地蟲をやつてみました。黒は何の氣もなくいきなりそをれ啄みましたが蠕々と動くので驚いて思はず取落しました、すると白はそれを引掴んで箱から外に出たがりますので氏が二羽共に出してやりますと白はそれをもつた儘一散に逃げ出します。黒は今更に掌中の玉を取られたのを悟つたといふみえで倉卒と白の後を逐ふて蟲を取り戻さうとします。けれども白もさるもの、見る間にそれを飲み込んでしまひました。後氏は更に蟲を三疋やりました。白の方は大喜びでしたが、黒は氣味惡がつて死んだのをやつと食べた許りでした。抜目ない氏は其の内の一疋に規那鹽を塗つてやつたのでしたが白はそれに氣付かぬらしく平氣で飲み込んでしまひました。

氏は白と黒との二羽をこれまでに育てゝから親の牝雞に返してやりました。これからのお話はそれから後の觀察であります。

夜になると二羽共親の雞と一緒に寐ます。けれども白も黒も牝鷄が二羽を繼子扱ひにして啄いてはいぢめるので、夜が明けるのを待ち兼ねてサッ〳〵と親から離れて勝手に遊びにゆきます。其の行く處は十尺許り離れた雞の元で、そこで砂を引

搔いたり啄いたりして、兄弟の雛から全く離れ二羽きりで遊ぶのであります。親がコッ〳〵と呼ぶと恐がつて反つて逃げていつてしまひます。十五日目に林檎の赤い皮を投げてやつたら、見た許りで互に警戒の聲を上げながら逃げていつてしまひました。けれどもそれを引くり返して白い方を上に向けてやりましたら、其の軟かい部分だけを食べたのであります。春といつても四月初めの未だ定まらぬ季候は時に暖く時に寒いので、暖を取るため氏は此の日二羽を臺所に連れていきました。そこで白と黒とは生れて初めて猫といふものを見たのであります。初めの中は猫をひどく恐れて逃げ隱れてゐましたが後になつて火が消えて室が寒くなつた時黒は何かのはづみで前後不覺に寐入つてゐる猫とすれ〳〵の距離に來ました。娑婆の風に當つて以來未だ一月と經ぬ白と黒とが猫に對して別に苦い經驗を持つて居るといふ譯ではありませんが雛に比べては第一に大さも形も異ふ怪物の猫を眼と鼻の近くに見ては戰慄しないのが僞であります。黒が自分の危い立場を知つて愕然と身を退けたのは無理もありません。けれども相手の猫は正體もなく熟睡して居て髭一本動さぬのに黒は漸く安心してドッカと許り座りこんだのであります。白は注意深い眼付で始終黒と猫とを見比べて事の成行を窺つて居ましたが、之も亦安心したものと見えて同じく心地よげに眠につきました。

第十六日。不慮の災難で黒が跛になつたので氏は二羽を一緒にして箱に入れ暖爐の後に置きました日頃元氣の白も兄弟の黒が病氣といふのでいつもの樣に暴れもせず、箱から飛び出しても遠くへはゆかないで數分毎に戻つて來ては靜にピョ〳〵いひながら慰め顏に黒の周圍を廻つてゐました。午後になつて黒は大に元氣を回復して箱の中で跛引き〳〵餌を啄んでゐました。白は黒の病の怠つた

のをみて安心したものか今は黒の側を離れて例の通り快活に遊び廻つてゐましたが、黒のピヨ〳〵といふ呼聲の聞える毎に一さんに馳けつけて少時の間黒を慰めては又去つて遊びました。それから後程經て氏は二羽を孵つた許りの一腹の雛と一緒にしてみました處が其の親とも子ともよく慣れ睦んだのであります。

概していひますと、白は黒に比べて體も大きく體質も丈夫であります。又好奇心に富んで居るといひませうか注意深いといひませうか、それに黒からみると遙に大膽不敵であります。白も黒も種々雜多な啼聲を出します。その聲は雞の雛特有のものとは全く異つてゐて反つて雀の聲に似てゐます。其の理由は恐らくは二羽が飼はれてゐた室の窓近く絶えず往來する雀の聲を眞似た結果と思はれます。斯くの如く鳥の其に摸倣の行はれますのは普通のことで少しも怪むに足らぬと申しますのは、凡そ鳥類が他の鳥の歌を眞似て其の通りに歌ふことの出來るとはよく人のいふことで、又實際不器用な方では有名な雀さへ敎育次第で他の鳥の歌を上手に眞似ることの出來るのは古來色々の人の精密な實驗に徵して明なことであります。前に白と黒とが色々の聲を出すと申しましたが其の聲の內には飢餓を訴へるもの、快不快の情を洩すもの、又好奇心、警戒、恐怖、譴責を現すもの等の區別があります、二羽共に目醒めて居る間は是等千差萬別の意味を現す啼聲を巧に使ひ分けて、所謂互の會話を交換するのであります。

次に氏は白や黒を觀察したと同樣の方法によつて、別の四羽の雛を觀察しました。其の內の二羽は砂の上で飼ひ、他の二羽は底に紙を敷きつめた箱の中で育てました。二日目の午後、砂の方の雛の一羽は引搔かうとする如く片足をぶる〳〵と震はせましたが、それきりでやめてしまひました。

それから二日、三日、は無事に過ぎ四日目になつて同じ雛は初めて本當に引搔きました。それと一緒に居る雛は餘程おくれてやつと引搔き初めましたがそれでも箱の中の二羽に比べると遙に早かつたのであります。

規那鹽の實驗は前と同樣の結果を齎しました。四羽共一度で懲りてしまつて二度と再び赤いものには觸れ樣ともしませんでした。六日目に四羽共窓臺から床迄距離にしたら一尺六寸もあらうかと思はれる處を飛び下りました。四羽の中で二羽だけは二尺九寸の距離を飛べますけれど、他の二羽にはこの藝當は出來ません。又其のよく飛べる中の一羽は四尺七寸ある机と床の間を飛び下りました。けれども五尺九寸の距離を飛ぶだけの力は未だありません。以上はハント氏の研究の大略であります。

面白かつた過去の追懷は、終生人を華やかな幼年時代に戻らせるといひます。ウオズヲウスもいつたやうに幼年時代は牧場や、杜や、流水や、其の他此の下界のあらゆる尋常の現象も、奇しき精靈の光りに包まれて宛ら夢裡に見る如く清く尊く鮮かに見えるものであります。思想の泉の涸れ感情の火の消えた時さへこの幼年時代を追憶しますと忽ちに清新莊麗の情想が胸を衝いて湧き出るものであります。

そこで話が前に後戻りしますが、人の父たり母たる人が心して子供に其の幼い間卽ち最も強い深い印象をうける幼年時代につとめて動物に親しむ機會を與へる樣にいたしますと、やがて子供が成人して後其の美しい樂しい記憶をたどつて科學者となりて研究の上に一新生面を開く上に成功することが出來ると思ひます。